

戦争はゴメンです

板橋 育夫

敗戦の年 国民学校1年生に入學

1945（昭和20）年4月、国民学校1年生に入學した。当時の日本の情勢を知る由もなかったが、太平洋戦争の末期だった。強烈に印象に残っている担任の先生の言葉がある。「爆弾が落ちたら、目の玉が飛び出るのよ、3本の指で目の玉をしっかりと押さえなさい。親指で耳の穴を置くまで塞いで、伏せなさい」の声だ。先生の顔を思い出せないのに、この必死の声だけが、69年たった今も聞こえてくる。

4年ほど前になるが、私たちも古希を迎えた。その年、中学校の同期が集まって、祝う会を開いた。それぞれが激動の70年を語ったが、私がひととき心引かれたのはA君の話だ。

彼は、開口一番「僕は戦災孤児でした」と話しました。「僕の母は、自分の小学校の入学手続きのため、疎

開先の新潟から上京し、3月10日の東京大空襲に遭遇しました。そのまま母は帰ってきませんでした。僕は家族を失い、その後一人ぼっちになってしまいました。幸いにも妻に恵まれ、子どもたちも育ちました。家族を持つことの喜びをかみ締めています」と。この年の3月10日、未明、東京都江東区は米軍爆撃機に襲われ、わずか2時間の攻撃で10万人の死者を出した。世界史に残る残虐非道な無差別攻撃だった。1937年のスペインのゲルニカに始まり、中国の重慶、ドイツのドレスデン、ベルリンと続き、東京、広島、長崎へと広がった。

私たちが味わった戦争による苦難の歴史を若い人たちに伝えたいと、折に触れて新潟日報の窓欄に応募してきた。いろんな方々から激励の言葉をいただいた。

S先生からの手紙

小学校5年生の時、隣の学級の担任だったS先生からお手紙をいただいた。長岡空襲の部分について紹介しよう。

日報の「窓」の投稿を見て大きな感動をいただきました

した。今年の猛暑も80歳を過ぎた私には耐え難いものですが、あの日の暑さもひどいものでした。私は師範学校在学中で、防空壕にいたたまれず、福島江ふくしまえの川の水にズッシリと浸り、栖吉の山まで走り、山の中で一部始終を見ました。

翌朝、山から市街地に戻り、死体をまたぎながら寮までたどり着きました。一服の休憩もなく担架をもつて町の片付けに出ました。すでにウジの湧いた死体を運び、大穴のなかへ投げてきました。山と積まれると石油をまいて火をつけ、火葬になったのだそうです。若い私たちは空腹をこらえてよく働きました。8月1日、2日の花火にいろいろな思いを込めてテレビに合掌しています。

従兄弟の妻のKさんからの手紙

手紙の中には、Kさん自身の戦争体験が綴られています。

「窓」いつも拝見していますが、本日5月6日は格別な思いでした。読んだ方々は全員胸深く反省したと思います。当時、私は師範学校に入学したばかりでし

たが、昭和19年、20年と、学徒動員で名古屋市の愛知化学へ行きました。疎開した蒲郡では真冬の東海地震に遭いました。(1945年1月13日)名古屋へ飛ぶB29、焼ける真つ赤な空…(1945年3月19日)。この時期のことはしっかりと思い出します。戦争の歴史を人間は繰り返していると感じます。

20年2月、魚沼の積雪4・25mの中、長岡師範学校受験のため、小千谷駅から実家まで(片道10里)2往復して受験しました。死ぬまで忘れません。10年7月2日、変則入学しました。

そこで8月1日の長岡空襲に遭うという体験者です。

手紙の中には、Kさん兄弟姉妹12人(8男4女)の昭和の歴史・「家族の略歴」も入っていた。

1922(大正11)年生まれの長男は、新発田歩兵連隊に応召され、インパール作戦に参加。ビルマで戦死した。2歳下の次男は、昭和20年3月応召。満州に送られた後、4年間シベリアに抑留された。3歳下の3男は18歳で志願し、舞鶴海兵団に入隊。軍艦「龍田」に乗り込んだが、20年5月5日、中部太平洋上で軍艦と共に沈んだ。

2人の子どもの戦死の公報と白木の箱を受け取った父親は、囲炉裏の灰の色が変わるほど涙を流し、一晚中泣き明かしたという。

73、175人の無言の声を忘れるな

毎年、8月になると忘れてはならないと思う人々がいる。日中「15年戦争」の新潟県戦没者・73、175人のことだ。わずか15年の間に、これだけ多くの死者を出した出来事を有史以来の越後の歴史の中に見出すことはできない。一人ひとりに父母があり、兄弟・家族があった。赤紙1枚で召集を受けて戦地に送られた兵士達、満蒙開拓団員として夢をふくらませた少年達、その前途はあまりにも無残であった。

太平洋戦争開戦時の戦勝気分は、1942年6月のミットウエー海戦の大敗北で微塵に砕けた。空母6艦のうち4艦が沈没し、制海権、制空権を失った。その後の戦闘は一方的であった。新発田歩兵16連隊が参加したガダルカナル島の戦いでは、4、184人の兵士が帰還してこなかった。多くが餓死、病死、玉砕だった。インパール作戦に参加した高田58連隊は、5、563人の死者を出した。食料などの補給のないままジャ

ングルでの戦闘に参加し、兵士たちは、飢えとマラリアなどで次々と倒れた。日本軍が通り過ぎた街道は白骨の山と化したという。

誰がこんな無謀な戦争を始めたのか。誰がこんな戦闘を命じたのか。その責任を問うこともなく68年が過ぎた。73、175人の苦悶のうめき声に代わって、戦争責任を問う時代がきたのではないか。

核戦争の恐ろしさを知っているだろうか

今年の4月26日、スイスのジュネーブでNPTⅡ核拡散防止条約の会議が開かれた。「いかなる状況でも核兵器を二度と使わない」との声明に、74カ国が署名したが、日本は加わらなかった。唯一の被爆国である日本の行動に、世界中から驚きの声が上がった。

2008年8月6日、新潟日報「窓」欄に私の投稿が載った。

若者に読んでほしい原爆詩集

若い人達にすすめたい一冊の詩集がある。峠三吉の「原爆詩集」だ。

今から63年前の1945年8月6日、一発の核爆弾

が広島市の上空で炸裂した。爆発の瞬間、秒速440分の爆風で木造家屋のほとんどが倒壊した。核分裂による火球の表面温度は数千度となり、この熱線によって人々の皮膚は焼け溶け、垂れ下がった。強烈な放射能を浴びた人は白血病を発症し、多くの人達が命を落とした。救援の人達も、二次被爆し、影響から逃られなかった。

三吉は、爆心地より3kmの地点で被爆し、中心地より逃れてくる被爆者の群れを見た。

「あの閃光が忘れえようか／瞬時に街頭の三万は消え／押しつぶされた暗闇の底で／五万の悲鳴は絶え／……やがてボロ切れのような皮膚を垂れた／両手を胸に／……泣きながら群れ歩いた裸体の行列（略）」。三吉の目に映った広島島の惨状は、この世の地獄であった。誰が一体こんな戦争を始めたのか。誰が一体こんな残虐兵器の投下を命じたのか。満身の怒りを込めて告発している。

時がたつにつれて、戦争の体験者は減り、言い伝えも薄れがちである。しかし、世界の大国が核兵器を保有している現在だからこそ、原爆を直接浴びた日本人は、「ノーモアヒロシマ、ナガサキ」を叫ぶ使命がある。

国防軍つくるなんて「とんでもない！」

「軍隊があれば国民の生命と財産を守れる」と豪語する政治家がいるが、それはウソである。1945年の敗戦時、日本軍は、720万人を擁していたが、国民の生命を守れなかった。戦争指導者たちは、国体の護持と、自らの権力や名誉を失わないで済ますにはどうしたらよいかに腐心し、敗戦・降伏を遅らせた。そのためにとれほど多くの国民が被害を受けたか計り知れない。現在の戦争は、ミサイルや核兵器が飛び交う時代だ。人類が人類を滅ぼしかねない時に、国防軍をつくるなんて、とんでもない。

全国至る所で「平和憲法9条を守れ」の運動を

秋葉区「9条の会」は、今年の3月17日、全国9条の会・事務局長小森陽一さんを迎えて7周年のつどいを開いた。170人が集った。5月3日の憲法記念日には、秋葉区の成人式が開かれた。若い人たちに憲法9条の大切さを知ってもらおうと、宣伝カーを出し、メッセージを入れたポケットティッシュを配布した。200個用意したが、全部手渡すことができた。18歳以上が参加する国民投票で勝利するために、全国至る

所で「平和憲法9条を守ろう」の運動を起こさなければならぬ。

国会の状況は改憲派が多数を占め、容易ではないが、国民の奥深くでは、国の将来を危うくする企てに賛同していない。大手新聞社の世論調査が、そのことをしめしている。勇気を出して、声を大にして行動しようではないか。年齢や病気などに負けていられない。私たちの未来がかかっているのだから。

(いたばし いくお・新潟市秋葉区「九条の会」事務局長)

憲法と歩いた戦後を

振り返って

久保田 幸雄

明治憲法下の私

私は15年戦争の始まった1931年に生まれ、15歳まで軍国少年として育てられました。

新潟市豊照国民学校の6年間、新潟師範付属国民学校高等科2年間、新潟師範学校予科3年まで大日本帝國憲法(明治憲法)の下にありましたが、憲法についてきちつと教えられた記憶はありませんでした。修身と体罰で強制された武道や軍事教練、予科練、陸軍少年飛行兵への受験が強要されましたが、幸か不幸か、私は近視のため不合格。まさに「首の皮一枚」で徴兵されませんでした。

本科生、予科2、3年も戦場や軍需工場に駆り出され、私たち予科1年40名が広い校舎の警備にあたりました。先輩たちが多くの記録を生んだグラウンドは芋畑と防空壕に変わりました。1945年、B29による新潟港への機雷投下、艦載機による「おけさ丸」などへの機銃掃射も始まり、新潟市も戦場となり、犠牲者も出ました。学校周辺の民家は延焼を防ぐため、強制的に疎開させられ、私たち一家も知人を頼り、京ヶ瀬村駒林(現在の阿賀野市)に転居しました。敗戦の玉音放送は大家さんのラジオで村の人たちと一緒に聞きました。難解で、言語不明瞭、しかも、雑音混じりでしたが、「とにかく戦争は終わった」とホッとしました。